

Title	トーマス・アイ・クック助教授著 プレートオよりパークに至る政治哲学史
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.7 (1937. 7) ,p.1093(165)- 1100(172)
JaLC DOI	10.14991/001.19370701-0165
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370701-0165">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370701-0165</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(1) D. V. Glass, 'The Struggle for Population.'  
(2) René Roy - Contribution aux Recherches Economiques.

十六四 (1911)

ある。第三に、需要法則の研究に於ては時に代替法則が、重大な障碍となつてゐる。獨占財が研究し易いのはこの點を特に考慮しないで好いからである。代替的性質を有する一群の商品を一括して研究すれば、略々獨占商品と同様の取扱ひを以て足りるが、併し多元相關法の發達は次第にこの障礙を克服しつつある。最後に、既に獲得された結果は、例へば獨占企業に於ては、實用的價值を持ち得る。

以上が氏の所説の概略である。エコノメトリックに關する論文は概して高度の數學式に終始するを常とするが、本書は記述極めて平易で、數學的知識に乏しい人にとつても何等の困難を感じしめない。本書には建設的新説と見られるものは皆無であるが、エコノメトリックなる新部門の概略を手取り早く知らんとする人々に取つては、極めて便利な手引きとならう。(Hermann & Cie, 定價十法)

### トーマス・アイ・クック助教授著『プレートオよりバークに至る政治哲學史』

高橋 誠 一 郎

茲に紹介せんとする『プレートオよりバークに至る政治哲學史』(History of Political Philosophy from Plato to Burke)は倫敦大學經濟學得業士、ロース・アンジェルス、カリフォルニア州大學政治學助教授トーマス・アイ・クック氏の著であつて、『ブレンチス・ホール政治學叢書』(Princeton-Hall Political Science Series)中の一冊として昨一千九百三十六年、紐育に於いて出版せられたものである。

本書は(一)「緒言、政治思想の本質」に次いで、(二)「希臘政治思想の背景及び濫觴」(三)「プラトーン、政治的理想主義の開基」(四)「アリストテレス、社會學及び倫理學としての政治學」(五)「羅馬政治思想及び基督教、希臘的傳統、ストア哲學、法律哲學及び福音倫理學」(六)「中世思想の背景及び一般的性質」(七)「聖アウグスティヌスより聖トーマス・アクイナスに至る教政教義」(八)「俗界の權力に對する行動自由の欲求、帝國主義及び國民主義」(九)「宗教會議運動、教會立憲主義及び調和的理想」(十)「マキアヴェリ、現實的俗界政治學及び國民的統一の理想」(十一)

トーマス・アイ・クック助教授著『プレートオよりバークに至る政治哲學史』

一六五 (一九〇三)

「ルッター及び宗教改革、道德的改革より國民主義及び國王神權」(十二)「カルヴィンの神政、倫理的貴族政治及び初期民主政治」(十三)「反王主義者(Monarchomachs)及び政治主義者(Politiques)」(十四)「信仰の自由、中央集權及び重商主義的國家に於ける主權」(十四)「ポードン、國王主權及び新中層階級」(十五)「反宗教改革、ジェズイット派及びドミニク教團、國民的及び國際的國家主權に對する倫理的攻撃」(十六)「北歐思想、異教寛恕、團體的聯邦主義及び國際的無政府主義の制限」(十七)「チュードア及びスチュアート王朝治下に於ける英國思想、權力、財産及び宗教に關する鬭争」(十八)「ホップズ、無政府主義に對する交替物としての專制主義」(十九)「ロック、財産の爲めの立憲主義」(二十)「亞米利加植民地、カルヴィン主義的神政及び英國自由主義、貴族主義的及び民主主義的概念の鬭争」(二十一)「モンテスキュー、國民的差違及び法律原理、專斷的政府攻撃」(二十二)「ルソー、自由及び平等の探求、新壓制政治の基礎」(二十三)「ヴォルテール、國民的政府及び人格の自由、ブルジュワジーの擁護」(二十四)「パーク、保守主義の基礎としての歴史的自由主義、土地所有郷紳の擁護」及び(二十五)結論より成る本文七百一十一頁の大冊である。

## 二

國民經濟學は國民的經濟生活の學である。而してあらゆる生活と等しく國民的生活も亦、一全體であつて、其の一面を科學的に了解せんとする者は當然他の總べての方面に關して幾分の知識を有さなければならぬ。然も斯くの如き普遍的結合中に在つて殊に密接なる關係を有するものは政治的及び經濟的の兩方面である。斯くして政治學及び經濟學は最も近接せる姉妹科學を構成する。殊に經濟學成立以前の經濟理論は經濟生活に何等の獨立をも期待することがなかつた。古代より始めて、凡そ第十八世紀後半に至る迄の經濟思想及び經濟學說の歴史を探求する者は特に政治思想史及び政治學說史によつて提醒せらるゝ所が多い。此の意味に於いてクック助教授の近業は亦、經濟

學史研究者の注意を惹くものである。而して著者は又幾多の箇所に於いて古來幾多の大政治思想家の活躍せる社會經濟的背景を明かにし、彼れ等の所說中に包含せられたる經濟理論を指摘するの注意を怠つてゐない。吾人は今本書を通讀して、特に經濟思想史と關係を有すること深き二三の箇所に就きて聊か所感を述べんとする。

著者は先づプラトンの全政治理論が、人々は相異なる職能に於ける専門家なりと做すの觀念に基くことを説いて、後年、特殊化及び分勞の學說がアダム・スミスの中に於いて、勞働の最大限の利用及び是れに由る資源の最大なる開發に向はしめらるゝ、生産經濟理論の基礎と爲るに至れることを指摘する。(Ibid., p. 47.)。而もプラトンは這般の理論に個人主義的學說を結合することを爲さずして、却つて之れをして計畫的社會の基礎たらしめたのである。(Ibid., p. 50.)。著者は又プラトンの共產主義を説明し、是れを以つてフランチェスコ教團の貧困の理想若しくはマルクス主義の理論と同一視することなきを警告する。プラトンは殆んど全く分配上に於ける正義の問題を念頭に懸くことなかりしの觀がある。不勞增收の不善は彼れの心を惱すことがなかつた。經濟的平等は儲かに彼れに取つては政治的活動の大目的ではなかつた。彼れは是れを以つて更らに根本的なる福利に對する必要な手段と思惟することすらなかつた。彼れは財産を取得するの才能が必然哲學的能力と關聯せしめらるゝことなきを覺知せるが故に、人々をして財産を通じて權力を取得せしむることを防止せんと欲したのである。是に於いて乎、彼れは更らに純正なる性質を有する貴族政治の基礎の爲めに財産を攻撃したのである。富が社會的卓越の徽章であるとしたならば、斯くの如き貴族政治の發達は阻止せらる可きである。(Ibid., p. 61.)。吾人は本書の著者がプラトンの理想國の基礎を以つて最も峻嚴なる社會主義なりと主張する一部論者の見解に同することなかりしを欣ばなければならぬ。(昭和四年版拙著『經濟學前史』二六二—二六三頁参照)。

而も吾人は著者が、等しく大哲ソクラテスの門に學び、一見産業社會化の近代的學說を提唱せるの觀あるクセノ  
フォンの政治經濟思想に論及することなかりしを遺憾とする。尙ほ著者はアリストテレスが生活に資する有生の  
道具として奴隸を觀、希臘人が夷狄に對して自然的優越を有するを認め、斯くて又前者が後者を奴隸たらしむるこ  
とを是認し、而して此の自然的奴隸の外、戰爭の際に捕へられたる者が征服者の奴隸と爲る所謂因襲的奴隸を以つ  
て單に偶然によるものと認め、更らに進んで、奴隸は必要であつて、自然に反するものではないが、而もあらゆる國  
の法律が奴隸たらしむる所の者は正しく然るものであると想定せらる可きに非ざるを主張せる旨を述べて、(Ibid.,  
pp. 99-100)、マケドニアのフィリップスが多數の希臘人を奴隸たらしめたが故に、同王室と密接なる關係を有し  
て居つたアリストテレスが明かに、自然的奴隸のみを是認せんとしつゝあつたに拘らず、戰に敗れたる希臘人を  
奴隸たらしむるの一事に關して明快透徹の論斷を下すことを避け、希臘人たると夷狄たるとを問はず、奴隸の本性  
を有するものは須らく奴隸たる可きことを固執せるの事實に論入することなくして終つたことも亦、吾人に取つて  
は物足らぬ感がある。

著者は可成りに多くの頁を割いてアリストテレスの經濟學を論じ、其の財産の本質及び機能に關する所論を紹  
介してゐるが、(Ibid., pp. 106-114)、而も彼れの個人的事情が如何に彼れの政治學說の上に影響せるかを看過せ  
ることは遺憾である。アリストテレスは實にマケドニア王及び其の代理者の保護の下に雅典に於いて自己の學校  
を主宰せるものであり、而してマケドニア王室は屢々社會革命の恐怖に襲はれた希臘諸邦の土地的及び商業的貴族  
階級によつて現存制度の闘士として仰ぎ迎へられたものであつた。彼れは其の個人的事情に於いても、到底、貧民  
政治と化せる民主政治に贊することを得ざるものであつた。而して彼れの私有財産擁護論並びに其の勞作者の民主

政治に對する抗論は當時の所有者階級によつて好感を以つて迎へられたのである。

著者は又、アリストテレスが利子の徵收を以つて不自然なりとして之れに反對せる旨を記してゐるが、(Ibid.,  
p. 111)、而も彼れは此の點に於いてアリストテレスの眞意が果して一切の貸金業務を非議するに存したるか、  
若しくは主として高利を以つて少額の金子を貸付くる小金貸業務を攻撃するに在つたかの問題に觸るゝことなくし  
て過ぎてゐる。此の問題こそは實にアリストテレスの經濟學を解釋する上に於いて最も重要なる意義を有するも  
のである。

吾人は著者のマルチン・ルッター觀に於いても多大の不滿を感じる。著者は曰く「羅馬加特力教會は猶ほ *usury* を  
非議しながらも、利子 (*interest*) の總べての形態に反對せる其の初期の立場を變更して、金融市場の發達を許容し  
た。洵にフッガー家は教會に對し、又舊教君主に對して融通を行ひ、其の富は銀行業務に依る所が多かつた。ルッ  
ターは百姓(彼れは百姓の出身であつた)が半ば新たな貨幣經濟の搾取に由つて苦惱しつゝあるを感じた。彼れは  
利子の總べての形態を悉く非難して、金融業者に對して熱烈なる敵意を示した」と。(Ibid., p. 324)。羅馬加特力  
教會が其の初期に於いて果して總べての形態に於ける利子を非議せるや否やも固より問題ではあるが、吾人が特に  
著者に向つて問はざるを得ざるは「利子の總べての形態を悉く非難せる」ルッターが何故に一千五百三十二年三月七  
日の書簡を以つてヴォルフガング・エルガーの寡婦に對し利子を徵して貸付く可きことを勸告したるかである。(昭  
和七年版拙著「重商主義經濟學說研究」四六一頁參照)。吾人は本書の著者にして、ルッターを以つて本原的に、又根  
本的に小ブルジョアジイの代表者と認め、同階級のイデオロギイによつて彼れの教義を説明せんとせるパスカル氏  
の著「獨逸宗教改革の社會的基礎」を參考せられたならば、其のルッター觀に於いて更らに一段の進歩を見ることが



出来たであらうと想像する。(『三田學會雜誌』第二十八卷第四號所載拙稿『パスカル著獨逸宗教改革の社會的基礎』参照)。

著者は重商主義の根本概念を以つて、政府は個人的幸福よりも寧ろ國民的幸福の見地よりして經濟的活動を統制し指導す可きものと做すに存するものと觀、(ibid., p. 378.)、其の專制主義的、統制的、全體的方面のみを認めて、之れが個人主義的、自主的、特殊の方面を閉却してゐる。而して吾人は所謂地金主義(bullionism)を以つて重商主義の最狭の法式化なりと做すの意見にも亦、不幸にして同意することを得ざるものである。(cf., ibid., p. 377.)。

## 三

クック助教授が本書中に於いて政治哲學史的に攻究せるプラトーンよりエドマンド・バークに至る時代は、大體に於いて吾人が舊著『經濟學前史』に於いて經濟思想史的に叙述せる時代に相當する。實にバークの存生中に於いてアダム・スミスは「新たな資本主義の基礎的經濟學」を發達せしめた。(ibid., p. 710.)。吾人は曰く「古代より中世を通じて第十八世紀の半ばを過ぐるに至るまで、經濟理論は經濟生活に何等の獨立をも期待することなくして直接之れを倫理的、宗教的若しくは政治的目的に従屬せしめて居つた」と。(同書三六頁参照)。而してクック助教授は曰く、バーク以前に於いては「唯物主義的經濟理論は猶ほ一般的に發達せしめらるゝことがなかつた(其の建立せらる可き基礎は固く据へられたのであるが)」と。(ibid., p. 708.)。

吾人は又、著者が種々なる社會の經濟的基礎並びに哲學者等が是れ等社會の裡に於ける經濟的地位の兩者の重要性を覺知しながらも、經濟的狀態を以つて一般的に至要なるものと做すの見解、若しくは思想家が全然階級又は個人的經驗によつて彼れ等の觀念を展開すると做すの見解を受け容るゝことなきの態度に賛せざるを得ない。(cf.,

ibid., p. vi.)。而も本書の著者が唯物的解釋に陥るを警戒すると共に、更らに深く、學說の經濟的背景と之れを表明せる思想家の社會的地位とを研究せられたならば、本書は更らに一段の深遠を加へたであらうと思はれる。

著者は過去の思想と現代の其れとの類同を認むることが甚だ屢々である。彼れはプラトーンを以つてムッソリーニの獨身者課税を豫示せるものと做してゐる。(ibid., p. 80.)。彼れはビエール・デュボアを以つて正しくウッドロオ・ウィルソン及び國際聯盟の先驅者と看做さるゝを得可きものと做してゐる。(ibid., pp. 234-235.)。彼れはデヘネーヴの宗教改革家ジャン・カルヴィンと「大戰前の米國大社會經濟學者」ソアスタイン・ヴェブレンとを以つて顯著なる奢侈を非難するに於いて全然符合するものと做してゐる。(ibid., p. 338.)。彼れは第十六世紀の佛蘭西政治學者ジャン・ボードンを以つて今日に於いては健全通貨論者と稱せらる可きものと做してゐる。(ibid., p. 377.)。彼れはクロムウェル時代に起つた「デイッガー」運動の理論を以つて、場所と時代との相違はあるが、現代のソーズイェット聯邦の理論と、而して或る點に於いては、必要なる變更を行へば、其の實際的施設と共通なるもの多きを認めてゐる。(ibid., p. 478.)。此の類の所言は殆んど枚擧に遑あらざるほどである。而も過去の大思想家の言説と現代思想の類同を認むること斯くの如く屢々なる本書の著者すら、「ナツイス」によつて眞に彼れ等自身のアールヤ主義を豫示せるものと看做さるゝの常なるルッターの見解が事實斯くの如き解釋を是認するものでないことを言明してゐる。洵にルッターは猶太人を非議した。而も彼れは基督の殺害者として、又眞宗教の敵として、主として宗教的基礎の上に立つて彼れ等を非議したのである。ルッターは又、國民的教會を欲求した。而も彼れは其の宗教的意見の眞なるを確信して之れを欲求したのであつて、國民的榮譽の附屬物及び支持物としてとはなかつた。(ibid., p. 325.)。

著者が果して那邊まで本源の資料に據つて過去の大政治哲學者の思想を傳へんとせられたかは深き疑問であり、吾人は其の他幾多の點に於いて多大なる不満を有するものではあるが、而も本書が大學生の爲めの教科書として相當の成功を收め得たことは固より疑ふの餘地なき所である。(菊版七百二十五頁。前附十八頁。丸善書店賣價金十三圓二十錢)。

# 前號(第三十一卷)目次

- 天體的景氣理論の二つの基型 寺尾 琢磨
- 經濟地理學的觀察の對象としての經濟現象に就いて 小島 榮次
- アルフレット・ケーラーの労働者解放理論 藤林 敬三
- 維新直前における百姓一揆の報告 (社會經濟史資料紹介) 野村兼太郎
- 古版經濟書解題 高橋誠一郎  
ジェーカッパ・アンダーリント著「千七百三十四年版『銀子は何事にも應ずる』」
- 三田學會雜誌第三十一卷前半總目次

●一冊定價金五拾錢  
●半年分金貳圓九拾錢  
●一年分金五圓四拾錢

郵税金壹錢五厘  
郵税共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛  
●營業に關する用件は發賣元宛  
●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十二年六月卅日印刷  
昭和十二年七月一日發行  
每月一回一日發行

三田學會雜誌  
第三十一卷  
第一號

編輯者 江田 範 保  
發行所 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内  
印刷者 金子 鐵 五郎  
印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地  
金子 活版所

發賣元 東京市芝區三田二丁目二番地  
丸善株式會社三田出張所  
電話三田(45)一一九二六番  
振替口座東京一一八五二番

●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 東京芝三田  
慶應義塾内  
理財學會  
振替口座 芝區三田二丁目二番地  
慶應義塾 東京一八二〇四番